

解説と体験談

それぞれの札の解説と、一部その内容にちなんだ体験談を載せています。



体験談は、2019年9月～12月の期間、名古屋市博物館、南陽図書館、名古屋市港防災センター内にて募集したものから句の内容に合うものを抜粋して掲載させていただいています。ご協力くださった皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。※掲載するにあたり送り仮名や接続詞など軽微な修正している箇所があります。※()内の地名・年齢は当時のものです。



救援物資の配付(南区柴田本通)
昭和34年10月15日

あ あたたかい支援を受けて目に涙

伊勢湾台風の直後から、全国から多数の物資や義援金が届きました。義援金は当時にして5億円以上にもなったそうです。

体験談

新築したばかりの家のかわらが飛んだ。子供だったのであまり記憶がない。学校が休みでうれしかったし、救援物資をもらい、ジャンパーをもらった記憶がある。うれしかった。(伊勢市、10歳、女性)



筏にて倒壊家屋の除去作業をする地域奉仕団(南区道徳通)
昭和34年10月3日

い 筏での荷物運びも慣れたもの

浸水した地域では、ボートと筏が唯一の移動手段でした。写真は倒壊した家の片づけを行う地域奉仕団の人々です。手慣れた様子で筏を乗りこなしています。

体験談

中学を卒業して養成工として大江町の会社に就職して半年。家は中村区でしたので、大きな被害はありませんでしたが、月曜の出勤は名鉄神宮前から中川運河の堤防づたいで歩いて通勤。体が大きかった私は特別救援隊として翌日から一週間、ゴムボートで2階まで水没している竜宮町一帯の屋根上の人達にカンパンと医薬品を届ける作業の毎日でした。ボートの周りは大きな丸太や壊れた家の残骸、豚や犬の死骸。こわかったのは、何時こわれた家の釘によってボートに穴があくかわからない事でした。(年齢など未記入)



日之出橋西詰浸水地帯
臨時船着場付近
(港区南陽町)日付不明

う 迂回してボートを漕いで回り道

浸水した地域では、流木が道をふさいでいたり渦を巻いている場所もあったため、ボートや筏が進むときにはそこを避けて通らなければなりません。なお、この写真の中央で左手を上げ指揮を取っている眼鏡の男性は、当時名古屋市長だった小林橘川氏です。

体験談

父の勤務先から、ボートを無償で貸してもらえました。当時ボートは貴重な交通手段でしたが、会社のご厚意で10日程借用していました。(南区六条町、14歳、男性)



町内を消毒して廻る衛生班
(瑞穂区熱田東町)昭和34年10月9日

え 縁板も剥がして撒いた消毒剤

伊勢湾台風の後には、水に浸った場所が沢山ありました。この水はとても汚く、赤痢などの伝染病が流行ることなどが心配されました。そのため水が引いた後は DDT などの殺虫剤で丁寧に消毒が行われました。



音楽で被災者を慰問する
金城学院の宣教師(南区明治小学校)
昭和34年10月14日

お おんがく かな いや こうし 音楽を奏でて癒す講師さん

写真の場所は、避難所となっていた南区の明治小学校です。
アコーディオンを弾いているのは、金城学院で講師をしていたアメリカ人の宣教師 マール・I・ケリー氏です。

体験談

当時避難していた中区丸田町には朝夕、松坂屋のミュージックホーンの音が聞こえてきました。「遠き山に日は落ちて」と記憶していますが、さすが名古屋の繁華街だと耳を澄ましていました。(南区六条町、14歳、男性)



水に浸かった畳を引き上げる
(南区南陽通)
昭和34年10月14日

か かいすい つ たたみ おも 海水に浸かった畳で重い

畳は水を含むととても重くなり運ぶのが大変でした。写真では、男性二人がかりで作業をしています。この時代は今よりも畳の部屋が多かったため、沢山の畳を片付けなければなりませんでした。

体験談

復興が始まると畳が不足してわが家に畳が届いたのは数か月後でした。(南区六条町、14歳、男性)



避難所の片隅で無心に遊ぶ子供
(南区笠寺小学校)
昭和34年10月8日

き ぎゃつぎょう むじゃき あそ こどもたち 逆境も無邪気に遊ぶ子供達

避難所で遊ぶ子どもたちの足元には、非常食らしき缶詰の空き缶があります。おもちゃも流されてしまって、身近にあるもので遊びを考えていたのでしょうか。

体験談

学校は休校で遊ぶ所もなく、浸水をしていたので古い畳の上に乗って筏遊びをした気憶も残っています。(熱田区大宝町、8歳)



くつ塚にもうでる市民(南区浜田町)
昭和34年11月30日

く づか めいふくいの ちじん くつ塚で冥福祈る知人たち

水が引いた後、南区浜田町のある場所に沢山の靴が流れ着きました。その場所は「くつ塚」と呼ばれるようになり、町の人が亡くなった人にお祈りをする場所になりました。翌年には慰霊碑が建立され、307人の遺骨が納められました。現在は、濱田南公園内に設置されています。



地元消防団の活躍(港区南陽町)
昭和34年10月14日

け けっかい げんぼ つど しょうぼうだん 決壊の現場へ集う消防団

伊勢湾台風襲来の直後から、各地域の消防団は救助活動や支援物資の運搬などの様々な活動を精力的に行いました。写真は、港区南陽地区の堤防の応急締切作業に勤しむ地元消防団の様子です。「南陽」と染め抜かれた揃いの法被を着て土のうを運んでいます。



被災後の清掃作業の様子
(港区)日付不明

こ やまちからあわ かたづ ゴミの山力合せて片付ける

伊勢湾台風の襲来後は、沢山の災害ごみが出ました。水が引いた後も、タンスなどの家具類は板やベニヤの部分が反り上がって変形してしまっていたり、洗濯機などの電化製品は各所に錆が発生して使い物になりませんでした。町の人々は隣近所の人たちと力を合わせて、片付けを進めていったそうです。



水が引き唯一の交通手段であった小舟を収納(南区又兵衛町)
昭和34年10月11日

さ さいがい あ まな ひと じょう 災害に遭って学んだ人の情

写真は、水が引いてこれまで唯一の手段だった小船をオート三輪に積み込んでいる様子です。顔には笑みが浮かんでおり、復興への喜びが感じられます。

体験談

日が過ぎるにつれ被害状況が徐々に分かり始めました。港・南区など南部がかなりの被害と聞きました。隣接に貯木場などが有り、それによる流木被害が多くなったようです。また岐阜で銭湯を営んでいる叔母の所も屋根が飛ばされる被害が出たので、祖父が弁当(おにぎり)を持って見舞いに行ったと聞かされて本当にすごい台風だったんだと思えます。昨今も自然災害が多く見受けられます。今後災害が発生しても、家族全員、又近所の人達が協力し合い少しでも被害が少なくなればと思います。(熱田区大宝町、8歳)



八号地貯木場堤防の応急復旧作業
(南区元柴田西町)
昭和34年10月5日

し じんりき きづ ふっきゅうあしが 人力で築く復旧足掛かり

現代とは違って技術が未発達だった時代、一人一人の力が大きな助けになりました。写真は堤防を直しているところです。海より土地が低い場所では、潮の満ち引きによって海水が入り出すため、堤防が復旧するまで町から水が引きませんでした。



臨港線の惨状(港区潮風町)
昭和34年10月8日

す せんろ あわ ざんがい ズタズタの線路哀れな残骸に

伊勢湾台風の高潮によって、線路や道路などもほとんどが壊れてしまいました。写真の線路では、枕木の下の土台も広い範囲にわたり削れています。道がなければ移動をすることも、救援物資を運ぶこともできないので、修理は大急ぎで進められました。



西稲永付近の浸水(港区西稲永)
昭和34年9月28日

せ せにもつすいちゅうほ こういのちが 背に荷物水中歩行命懸け

水害に遭った被災地では、人々は引き潮の時間帯を見計らって、荷物を担いで海水の中を歩いていました。写真では見えませんが、水中にはガラスや瓦の破片などが散乱していて大変危険な状態でした。

体験談

水が出て、父につかまり妹と弟と一緒に南区役所に逃げましたが、その時豚やトイレの汚物と一緒に水の中を歩いた事が今になっても忘れられません!! (港区港栄、11歳、女性)